小鹿野歌舞伎隆盛の仕組み

—— 長若地区の伝承事例 ——

Mechanism of the rise of the Ogano Kabuki

A case of its transmission in Nagawaka district

佐藤　節子

SATO Setsuko

According to a review of previous studies on and a field survey of the Ogano Kabuki, the mechanism that allowed it to rise to prominence may be summed up with the following four points:

1. Events entirely organized by locals
2. Revival of children's kabuki by shrine parishioners
3. Increase in the number of practitioners who would inherit and pass on the art, due to non-shrine parishioners and junior high school students
4. Unity of the organization

The actual state of transmission described below was revealed through a field survey of a kabuki performance at the Regular Festival of the Yamato Takeru Shrine in Nagawaka district. The driving force of transmission of the Ogano Kabuki is pride in the traditions that locals have inherited. It was this that prompted the revival of children's Kabuki, and increased Ogano Kabuki's practitioners, audience and supporters. Moreover, one of the junior high school alumni went on to successfully inherit the title of *tayū*, because he had experienced kabuki in the period of integrated study in junior high school.

1. はじめに

埼玉県北西部に位置する埼玉県秩父郡小鹿野町のキャッチコピーは「花と歌舞伎と名水のまちおがの」である。小鹿野には日本百名山の両神山、日本の滝百選の丸神の滝、平成の名水百選の毘沙門水、日本の地質百選の「ようばけ」などに代表される自然がたくさん残っている。近年、両神山麓花の郷では日本有数の規模を誇るダリア園、尾ノ内渓谷では氷柱といった新しい観光スポットがでてきている。2011年（平成23年）9月には、小鹿野町を含む秩父地域がジオパーク秩父として認定された（小鹿野両神観光協会、2015）。

このような豊かな自然に加えて、小鹿野町は歌舞伎という文化的特徴を併せ持っている。小鹿野歌舞伎は埼玉県指定無形民俗文化財であり、その保護団体として指定されている小鹿野歌舞伎保存会は、2003年（平成15年）3月に伝統文化活性化国民協会の表彰を受け、2004年（平成16年）10月に地域伝統芸能活用センターより「地域伝統芸能大賞」を、2006年（平成18年）11月には埼玉文化賞を、2009年（平成21年）には「埼玉・教育ふれあい賞」を受賞した。さらに、歌舞伎を文化使節として派遣する「地域間文化交流事業」は好評を得ており、これまで県内外百十か所で公演を行った（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

小鹿野歌舞伎がこのような隆盛を極めた要因は何なのか？山間の地域では少子高齢化の波はいち早く到来していることと思われるが、それ故の危機意識がなせる技なのか？本研究では小鹿野歌舞伎の隆盛の仕組みを探ることを第一の目的とし、さらに、その伝承事例として小鹿野町長若地区の実態を探ることを第二の目的とする。

2. 方法

小鹿野歌舞伎隆盛の要因や、歌舞伎伝承の実態を探るために、平成27年2月20日小鹿野町教育委員会の山本正実氏訪問し、以下に掲げる13回の歌舞伎上演の取材を行った。平成27年3月14日小鹿野町般若にある日本武（やまとたける）神社（十六様）の神楽殿で行われた「日本武神社祭り」での長若中学校生徒の歌舞伎、長若小学校児童の歌舞伎、および十六若連歌舞伎。3月21、27、28、29日東京都台東区浅草神社境内特設舞台で行われた「第7回浅草奥山子ども歌舞伎まつり」での小鹿野町子ども歌舞伎、千溝歌舞伎保存会子ども歌舞伎（魚沼市）、みらい座子ども歌舞伎（文京区）、

および浅草子ども歌舞伎会（台東区）の歌舞伎上演。4月17、18日「小鹿野春祭り」において、小鹿野市街地内の上町屋台で行われた上町子ども歌舞伎と上町若衆歌舞伎、春日屋台で行われた春日町若連歌舞伎と小鹿野歌舞伎保存会歌舞伎、ならびに小鹿野町観光交流館多目的ホールで行われた小鹿野歌舞伎保存会歌舞伎。5月2日秋川きららホールとホール前広場で行われた「全国地芝居サミット in あきる野」の秋川歌舞伎と菅生歌舞伎。5月3日小鹿野町下小鹿野津谷木にある木魂（きむすび）神社（お天狗様）の常設舞台で行われた「木魂（きむすび）神社祭り」の津谷木子（つやぎ）ども歌舞伎と津谷木（つやぎ）若連有志歌舞伎。7月5日小鹿野町下小鹿野にある小鹿神社（紫陽花神社）境内で行われた「第10回小鹿野あじさい祭り」での歌舞伎サークル「うぶ」の上演。10月3日小鹿野町下小鹿野にある奈倉妙見宮境内の常設舞台で行われた「奈倉妙見宮秋祭り」の奈倉子供歌舞伎と奈倉女歌舞伎。10月10日小鹿野町両神小森にある諏訪神社境内の諏訪の森記念館で行われた「小森諏訪神社秋祭り」の小森子ども歌舞伎と小森歌舞伎。11月15小鹿野文化センターホールで行われた日埼玉県芸術文化祭地域文化事業「歌舞伎・郷土芸能祭」（第45回小鹿野町郷土芸能祭）での小鹿野町各地区の歌舞伎上演。12月12、13日「飯田八幡神社例大祭」（鉄砲まつり）において小鹿野町飯田にある飯田八幡神社境内の屋台で行われた三田川中学校生徒の歌舞伎、上飯田子ども歌舞伎、および上飯田若連歌舞伎。これに加えて文献研究も行った。

3. 結果と考察

3−1. 小鹿野歌舞伎隆盛の仕組み

取材および文献調査を通して、小鹿野歌舞伎には4つの仕組みがあることが判明した。それらは、①すべて町民でこなす、②子ども歌舞伎の復活、③伝承者の拡張、④組織の結束である。以下、この4点について考察を進める。

3−1−1. すべて町民でこなす

歌舞伎の挙行には役者以外に多くのスタッフが必要になる。一般的に歌舞伎を上演するとなると、劇場の確保、指導者や囃子方の招聘、衣装や小道具の調達、大道具の制作と組み立て、照明や音響などの劇場スタッフ、広報やマネージメントなどマンパワーに莫大な費用がかかる。小鹿野町には役者が付けるかつらの床山を40年ほど前から務める者、化粧担当者として日々工夫を重ねる人々、着付け担当者、昔からある地芝居のかたちを残すために使命感を燃やして指導をす

る師匠、黒子を担当する「くろこ組」、役者のセリフの間に三味線を弾きながら物語の筋などを語る太夫などがおり、裏方すべてを町民が先輩から受け継いで行っている（小鹿野歌舞伎後援会、2010）。

①小鹿野町の歴史

すべて町民でこなす仕組みの背景にはこの町の繁栄の歴史がある。秩父盆地のほぼ中央に市街地を形成している小鹿野町の歴史は古く、約1,000年以上前の平安時代中期に編さんされた「和名抄」に記されている「巨香郷こ（お）かのごう」が小鹿野の始まりといわれている。小鹿野町は秩父から志賀坂峠を越え、群馬へと通じる信州・上州道の要衝に作られた市場町として栄え、西秩父の物資の集積地として賑わった。江戸時代から明治にかけては生糸の町として繁栄し、当時最先端の文化が町中に花開いた。当時の繁栄を物語る資料として、小鹿野春まつりで曳廻される屋台・笠鉾があるが、これらは埼玉県指定有形民俗文化財となっている。1911年（明治44年）には常設の芝居小屋（愛宕座）が建てられ、昭和中期までは芸者も多くいたとのことである[1]。

町制施行も県内では川越に次いで古く、上小鹿野村は1869年（明治2年）に小鹿野町と改称され、1889年（明治22年）に下小鹿野村・伊豆沢村が合併し、1955年（昭和30年）に長若村、1956年（昭和31年）に三田川村・倉尾村、2005年（平成17年）に両神村が合併した。中心部の小鹿野地区は県内でもいち早く教育・交通・産業の振興など各分野で近代化が進められ、西秩父地域の中心地として発展してきた。

小鹿野町には、鉄道路線がないため、公共交通機関を利用する場合には、鉄道のある秩父市からバスの利用となる。公共交通機関などの交通網が発達せず、開発が進まなかったため当時の面影を今日まで残すこととなった（小鹿野両神観光協会、2015）。

②小鹿野歌舞伎の歴史

次に、この町の繁栄を土台にして根付いた小鹿野歌舞伎の歴史に着目する。小鹿野歌舞伎は、今から約二百数十年前の江戸時代中ごろに始められた。町内には1792年（寛政4年）に歌舞伎を上演した記録も残る。1804~30年の文化・文政期に活躍した秩父歌舞伎の祖、初代坂東彦五郎は秩父地方で一座芝居を組織し、その後勇佐座、天王座、大和座と引き継がれた。小鹿野の大和座は長瀞の和泉座とともに明治・大正期に当地域の最盛期を作り、秩父地域はもとより群馬県まで興行を行っていた。昭和に入り、高砂座、秩父座、梅松座、新大和座と一座芝居も大きく変化したが、映画やテレビの普及、高度経済成長、社会構造の変化などの影響を受け1955年（昭和30年代）以降は衰退の時期を迎えた。道具類も老朽化し、役者も観客も少なくなり、このままでは消滅してしまう危機感が広がった。その後、故郷の大切な文化遺産を守ろうという機運が高まり、

旧大和座系の役者と町内各地で地芝居を続けてきた人たちが合同して1973年（昭和48年）に小鹿野歌舞伎保存会が結成された。「小鹿野の歌舞伎芝居」は1975年（昭和50年）に埼玉県指定無形文化財となり[2]、歌舞伎保存会はその保護団体として指定を受けている（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

③歌舞伎上演の機会、舞台、支える人々

小鹿野町内では十六・小鹿野・津谷木・奈倉・上飯田・小森の6部会に伝承され、それぞれ地元の神社の祭りの際に氏子が中心となって歌舞伎を演じている。そのほかに1971年 （昭和46年）より始まった郷土芸能祭を含め、年6~7回定期的に常設舞台で上演される。

町内11か所に残っている舞台の内、観客が屋外で見物する舞台には神社の神楽殿や小屋に花道をつけた掛け舞台や、祭り屋台（山車）に芸座・花道を張り出す舞台があり、さらに屋根付きの観客席と桟敷席を有する歌舞伎舞台も現存する。これらのうち、「木魂神社神楽殿」と「羽黒神社（宗吾神社）の舞殿」は小鹿野町指定有形民俗文化財となっている。

1979年（昭和54年）小鹿野歌舞伎保存会は県知事より文化ともしび賞[3]を受賞し、以降、太夫・衣装方・指導者・かつら師・写真家といった小鹿野歌舞伎を支える人々が文化ともしび賞を受賞している。1980年（昭和55年）には県費補助事業として歌舞伎衣装・大道具収蔵庫を建設し、以後町民が大事に保管している（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

「町中が役者」という歌舞伎の町の面影を残し、すべて町民でこなし、地芝居のデパートともいわれているが、そこには町の繁栄や歌舞伎一座の活躍の歴史が背景にあり、歌舞伎上演のための時間と場所が受け継がれ、人々の力が結集している。

3−1−2. 子ども歌舞伎の復活

小鹿野歌舞伎隆盛の仕組み2つ目は、子ども歌舞伎を復活させ指導に力を入れている点にある。後継者育成面での意義はもちろんだが、子ども一人出演すれば最低2人は観に来ることになるので観客を増やすことができる。さらに、保護者達は歌舞伎のよき理解者となりサポーターの役割を自然と行うことになる。

①子ども歌舞伎の歴史

子ども歌舞伎の創始は初代音羽屋を名乗った坂東彦五郎で、西秩父の少年を集めて「勇佐（ゆうさ）座」という子ども芝居の一座を組織したとのことである。明治から大正にかけて秩父地域の歌舞伎は最盛期を迎えたが、この間、上飯田で子ども歌舞伎が盛んであったとも伝わっている。

小鹿野町での子ども歌舞伎は1918年（大正7年）から1924年（大正13年）まで、大和座の太夫

としても活躍した花柳楽寿師匠が指導した。五歳から十七歳までの少女たちが長唄、常磐津、清元などの習い事と一緒に歌舞伎を教わった。小鹿野の春祭りでは屋台の上で昼は少女たちによる所作が、夜は張り出し舞台で夜通し子ども歌舞伎が上演されていた。この一座はたいへんな人気を博し、各地を巡業して回ったということである。

昭和に入り映画に娯楽の座を奪われ、戦時中は歌舞伎もままならない状態だったが、1947年（昭和22年）ごろ花柳楽寿師、海老沢千代師により子ども歌舞伎が復活し1955年（昭和30年）ごろまで続けられた。

②子ども歌舞伎の復活と隆盛

現在、子ども歌舞伎に取り組んでいるのは、上町のこどもたちを中心とし、町内広く募集したメンバーである。歌舞伎の後継ぎを育て伝統を守ろうと1987年（昭和62年）に復活した。子ども歌舞伎を復活させた主導者（柴崎好一さん）には、「子どもに継承しながら青少年の健全育成が図れたらすばらしい事だ」という思いや「子どものうちにいい思い出をつくれば、大人になって一度は町を出ても、いつかは小鹿野に帰ってきてくれる」という思いがあった（小鹿野歌舞伎保存会、1994）。

今では、春祭りなど各神社の祭りでの上演に加え、県の内外まで活動の範囲が広がっている。これまで札幌市の子ども歌舞伎フェスティバル、第1回・7回・10回・12回全国子ども歌舞伎フェスティバル in 小松（石川県小松）、全国地歌舞伎フェスティバル（島根県）、かながわドームシアター地芝居2004、ぐんま子ども歌舞伎フェスティバル、第十六回全国地芝居サミット in 芦野温泉、かながわ伝統芸能祭地芝居2006、第十七回全国地芝居サミット in おがの、浅草奥山こども歌舞伎まつり、第14回郷土芸能ねりま座、彦五郎祭などに参加した。

近年では、伝統と格式を誇る長浜曳山子ども歌舞伎（滋賀県）、小松曳山子ども歌舞伎（石川県）とならんで、日本三大曳山子ども歌舞伎とも称されている（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

3−1−3. 伝承者の拡張

小鹿野歌舞伎隆盛の仕組み3つ目は、歌舞伎を氏子以外の住民にも広げて伝承した点である。中学生の歌舞伎体験学習や町民の歌舞伎サークルへの参加によって、自分たちもその継承の担い手であるという誇りを持つことができ、町への愛着心を養うことにもなる。伝承者の拡張は、小鹿野町教育委員会の働きかけによって行われた。

①中学生の歌舞伎体験学習

中学生の歌舞伎体験学習は、小鹿野町立の三田川中学校と長若中学校で行われている。

三田川中学校（堀口芳嗣校長・生徒数32人）は、地域に伝わる伝統文化を学ぼうと2003年（平成15年）から小鹿野歌舞伎の体験学習に取り組んでいる。授業では、小鹿野歌舞伎保存会の指導を受け、例年11月の中学校文化祭、町の歌舞伎・郷土芸能祭、十二月の八幡神社での祭りで上演している。三田川中学校では生徒だけで役者から裏方までつとめようと取り組みがなされている。小鹿野歌舞伎保存会員の南廣さんがせりふと振り付け、高岸茂子さんが下座音楽（三味線）の指導を行っている。

長若中学校（長谷川修治校長・生徒数35人）では、総合的な学習の時間を活用し、全生徒が2つの班に分かれて地域の文化や歴史を学んでいる。その中の1つ、歴史伝統班は、先人が築き上げた貴重な文化遺産である小鹿野歌舞伎の継承に2002年度（平成14年度）から取り組み、歌舞伎の演技、化粧、下座音楽まで一連の過程をすべて生徒が行っている。

毎年3月に地元の日本武神社の祭りや町の歌舞伎・郷土芸能祭で上演したほか、町の養護老人秩父荘夏祭り、町の健康ふれあいフェスティバルや中学校での学習発表会などで上演している（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

この活動を通して、人と人がつながることの大切さや、一体となって芝居を完成させる喜びを味わっている。また、小鹿野町で生活する人々の「生き方」を学ぶことができ、町を愛する心や、誇りを持って伝統や文化を継承する態度が養われるようになってきた（清野、2008）。

学校では校務員として勤める小鹿野歌舞伎保存会員の南廣さんが振り付けなどを指導、三枝藤太郎さんが笛と衣装、田陽文子さんと高岸茂子さんが三味線、森川文行さんが化粧の指導をしている。

2011年（平成23年）には「全国中学校研究協議会埼玉大会」で公演し、大きな反響を受けた。長若中学校の歌舞伎伝承は、これまでの活動が評価され、2012年度（平成24年度）「彩の国教育ふれあい章」を受賞している。また、2013年（平成25年）10月27日に長若で10年ぶりに開催された麦わら葺きの歌舞伎舞台「羽黒神社（宗吾神社）の舞殿」での「舞殿歌舞伎」に長若中学校生徒も出演した（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

両中学校は2016年（平成28年）4月、町立小鹿野中学校に統廃合する予定である（小鹿野町、2014）。今後、中学生の歌舞伎体験学習がどのように進められていくのか注目して行きたい。

②歌舞伎サークルうぶ

小鹿野歌舞伎の継承は小鹿野町内五地域の神社の祭りにそれぞれの氏子が奉納する形で守り伝

えられてきた。そのため氏子区域以外の人は歌舞伎を体験する場がなかった。

歌舞伎のまちづくり事業が進められる中で町民が広く歌舞伎に親しむ機会を作ろうと1996年（平成8年）から町主催の歌舞伎入門教室が開催され、これまで80人近くが歌舞伎を体験した。これらの人々と小鹿野春祭りなどで歌舞伎イベントに参加し、歌舞伎に関心を寄せる人々が2002年（平成14年）5月に作ったサークルが「歌舞伎サークルうぶ」である。伝統的な歌舞伎伝承にとらわれず、初（うぶ）な気持ちで取り組んで行こうという団体である。活動は広範囲で、4月の小鹿野春祭り、7月のあじさい祭り、8月の七夕フェスティバル、歌舞伎・郷土芸能祭などで上演したり、様々なイベントを行ったりしている（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。

3−1−4. 組織の結束

小鹿野歌舞伎の組織は、図1に示すように小鹿野歌舞伎保存会傘下団体と非傘下団体に分かれる。

傘下団体は小鹿野、津谷木、上飯田、十六の4部会で、結束して小鹿野歌舞伎の伝承を守っている。各部会には子ども歌舞伎があるが、それらを総括するのが小鹿野子ども歌舞伎である。各部会で奉納の祭りを行うとき、他の部会の者は裏方として協力を互いにする。県内外から出演の依頼があったとき、各部会から人を集め小鹿野歌舞伎あるいは小鹿野子ども歌舞伎として出演をする（東京学芸大学岩田研究室、2006）。

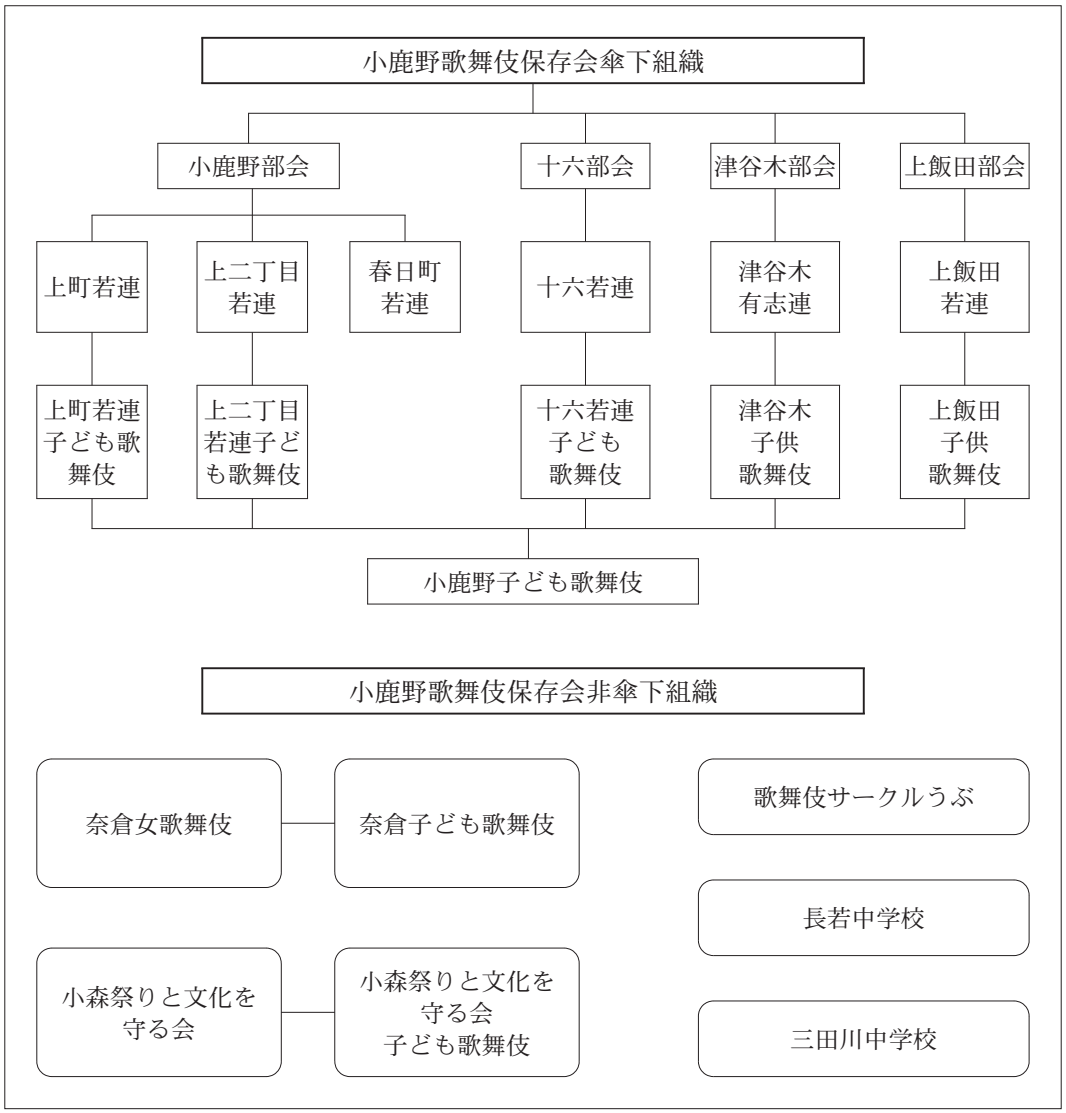
一方、非傘下団体には奈倉女歌舞伎と奈倉子とも歌舞伎、小森祭りと文化を守る会とその配下の子ども歌舞伎、歌舞伎サークルうぶ、三田川中学校、長若中学校がある。それぞれ独立した団体として活動しており、伝統を打ち破って新たな展開を試みている。これらの団体は、非傘下といえども小鹿野歌舞伎保存会の協力抜きでは存続が難しいのが現状である。

人口13,000人の町に18もの歌舞伎団体が活動しており、他に類を見ない様相だが、各団体が独自の活動を進めており、互いに協力し合いながら刺激を受けつつ切磋琢磨をして発展している様子がうかがえる。

3−2. 長若地区の伝承事例

ここからは、2015年3月14日㈯日本武（やまとたける）神社例大祭で上演された歌舞伎の取材を通して、長若地区の歌舞伎伝承の実態を探る。上述した小鹿野歌舞伎隆盛の4つの仕組みごとに捉える。

図1　小鹿野歌舞伎組織図（佐藤節子作図）



3−2−1. すべて町民でこなす

①長若地区の歴史

小鹿野町の南東部に位置する長若地区はかつて長若村と称し、1889年（明治22年）に長留（ながる）村と般若（はんにゃ）村が合併して成立した。明治時代は養蚕・製糸産業が盛んで、長若村に秩父銘仙の絹織物工場が多くあったという記録もある（原田、1996）。長若村は1955年（昭和30年）に小鹿野町と

合併し、現在はきゅうり、ナスなどの生産が盛んである。

②歌舞伎一座と衣装・大道具

長若地区は明治・大正期に活躍した歌舞伎一座「大和座」や「天王座」の本拠地である。これらの一座は、夏は農業を行い、冬になると各地の舞台を巡って生活していた。秩父地方以外にも群馬県や新潟県まで行ったという。太夫・衣装などの裏方も一座ですべて行っていた。威勢がいい時代物が好まれたという（東京学芸大学岩田研究室、2006）。

長若地区は歌舞伎衣装・大道具収蔵庫の所在地でもある。収蔵庫は三代目音羽屋坂東彦五郎の孫にあたる三枝健一さん宅の敷地にあり、その長男の藤太郎さんが保存会の副会長として衣装・小道具の責任者を担っている。各部会の上演のたびに貸し出しをしており、天王座が所有していたものが多いが、役者の体格が良くなったので新たに新調した衣装も多い（小菅、1993）。

③十六歌舞伎[4]

長若全体が氏子となっている日本武神社の春季例大祭では、大和座に奉納歌舞伎を依頼していたが、昭和21年からは地元の者たちによって歌舞伎が演じられるようになった。これが十六歌舞伎の始まりである。三代目音羽屋坂東彦五郎・坂東彦四郎。片岡みどりなどを師匠として呼び、指導を受けていた。この十六歌舞伎は十六若連が受け継いでいる。長若4~6区の者が多いが、それら以外の者がやってもいいという。十六歌舞伎が始まって以来、途切れることなく行い続け親子3代が役者というのも珍しくない。しかしながら、十六若連のみでは裏方（太夫・かつら師・お囃子など）がいないため、他の部会の協力を依頼する。

稽古は1月下旬から行う。本番前日まで7~10回の通し稽古と2回の太夫との合わせ稽古がある。その年に何の幕をやるかはとくに決まりはなく、自由に好きな幕をやるという。本番前日には花道・受付の準備をする。昔は1日5幕ほど上演していたが、現在は2幕になり、22時ごろには終演となる。その後、楽屋で協力をした保存会へのお礼も兼ねて打ち上げ（直会（なおらい））が始まり、酒がふるまわれる。楽屋の囲炉裏では毎年恒例の目刺しを炙って酒の肴とする。翌日は花道の解体などの片づけを行う。十六若連の費用はすべて花代でまかなわれる。花をかけてくれたら名前と金額を張り出し、披露する。金額は景気づけといって一桁多く書いて張り出す。花返しは酒や手ぬぐいなどである（東京学芸大学岩田研究室、2006）。

3−2−2. 子ども歌舞伎の復活

取材時の十六若連子ども歌舞伎では、小学3~5年の9人の子供たちが「十六嫩（ふたば）三番・花の口上」と「青砥稿花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）　白波五人男稲瀬川勢揃（せいぞろい）之場」を上演した。客席は保護者たちで埋め尽

くされており、子ども歌舞伎による後継者育成、観客動員、およびサポーター増員という効果を確認することができた。

3−2−3. 伝承者の拡張

神社の祭りに舞台で演じることができるのは氏子のみというしきたりに風穴をあけたのが長若中学校の歌舞伎上演であり、その先導は小鹿野町教育委員会が担った。

取材時には、長若中学校奉納歌舞伎「菅原伝授手習鑑　吉田社頭車引之場」を8人の中学2、3年生が上演した。役者に加えて義太夫や下座三味線、舞台上手で間合い良く木を床に打って効果音を出すつけ、および黒子は9人の中学生が担当した。柝（拍子木）と太鼓は教諭2人が行っていた。準備の様子を見学したが、化粧は自分たちで行っていた。衣装の着付けやかつらの装着は保存会の人々が行っていた。

3−2−4. 組織の結束

図1に示したように、十六若連は小鹿野歌舞伎保存会傘下組織である。取材時には、十六若連奉納歌舞伎「絵本太功記十段目尼ケ崎閑居之場：夕顔から」を大人10人で上演した。中学校の総合の時間の取り組みにより太夫の後継者が育ち、新人太夫が弾き語りを行った。長若中学校の卒業生が小鹿野町で働きながら義太夫初デビューしたわけである。また、役者としては長若中学校2年の女子が活躍した。若い後継者が育っており、長若地区の歌舞伎の伝承の実態を垣間見ることができた。

4. まとめ

小鹿野歌舞伎の取材と文献研究により、小鹿野歌舞伎隆盛の仕組みには次の4点があると結論付けた。①すべて町民でこなす、②氏子による子ども歌舞伎の復活、③氏子以外の町民や中学生による伝承者の拡張、④組織の結束。

また、長若地区の日本武神社例大祭で奉納上演された歌舞伎の取材を通して、以下に示す伝承の実態を明らかにすることができた。小鹿野歌舞伎伝承の原動力は、町民たちが受け継いできた伝統への誇りである。それが子ども歌舞伎の復活を促し、後継者や観客および支援者の増加へとつながった。さらに中学校の総合的な学習の時間における歌舞伎体験の実施によって、卒業生の

中から太夫の後継者が出現した。

5. 今後の課題

今回は小鹿野歌舞伎隆盛の仕組みと長若地区における伝承の実態についての研究だったが、今後は小鹿野町の他の地区の歌舞伎の特色について分析し、さらに小鹿野町の実施した歌舞伎のまちづくり事業について探求していきたい（山本、2004）。

注釈

1. その後愛宕座は1971年（昭和46年）に解体された（小鹿野町教育委員会社会教育課、2015）。
2. その後小鹿野歌舞伎は1977年（昭和52年）に無形民俗文化財に変更となった（埼玉県教育委員会、2015）。
3. 埼玉県では、県内各地において地道な文化活動を続け、地域文化の向上に貢献されている個人及び団体を、毎年「文化ともしび賞」により顕彰している（埼玉県庁、2015）。
4. 日本武神社の通称名は十六様である。天台修験道の十六善神社と呼ばれ、起源は古く奈良時代である。明治元年の神仏分離令により日本武神社と名を改め、十六善神は裏手の横山南光山常光院に移された（日本武神社建設委員会、1999）。

引用・参考資料

秩父市教育委員会編『秩父歌舞伎　重要無形民俗文化財伝承活動事業報告書』1991.

原田洋一郎「明治～大正期の秩父地域における絹織物生産発展の一側面」『歴史地理学調査報告』第7号，pp.75－87，1996.

平野井ちえ子「小鹿野歌舞伎の現在」『人間環境論集』法政大学人間環境学会，pp.23－36，2005.

十六若連『歌舞伎上演プログラム』2015.

木村たき子「小鹿野子ども歌舞伎と伝統文化の継承」日本福祉文化学会編集委員会編『新しい地域づくりと福祉文化　新・福祉文化シリーズ3』明石書店，pp.227－235，2010.

小菅光夫『木版・小鹿野歌舞伎の魅力―秩父地芝居』まつやま書房，1993.

丸山巌『―秩父・小鹿野の地芝居―1973~2003年―「歌舞伎祭文」』2004.

日本武神社建設委員会編『日本武神社改修記念誌』1999.

小鹿野歌舞伎後援会編『小鹿野歌舞伎写録』2010.

小鹿野歌舞伎保存会編『子供歌舞伎五周年記念誌　ねえらぼっち』1994.

小鹿野町ホームページ，2015．http://www.town.ogano.lg.jp/index.html

小鹿野町『広報おがの』7月号，p.3，2014.

小鹿野町教育委員会社会教育課編『第45回小鹿野町郷土芸能祭　歌舞伎・郷土芸能祭パンフレット』2015.

小鹿野両神観光協会ホームページ，2015.
http://www.kanko−ogano.jp/ogano/

埼玉県庁ホームページ，2015.
https://www.pref.saitama.lg.jp/a0001/news/page/news141117−06.html

埼玉県教育委員会ホームページ，2015.
https://www.pref.saitama.lg.jp/f2216/bunkazai−kensu.html

佐藤節子「小鹿野歌舞伎隆盛の仕組み」『日本体育学会第66回大会予稿集』p.401，2015.

佐藤節子「小鹿野歌舞伎の伝承―長若地区の事例―」『第26回比較舞踊学会抄録』pp.14−15, 2015.

清野洋「Let's Try 総合学習　歌舞伎など地域資源を有効活用　埼玉県小鹿野町立長若中学校」『内外教育』時事通信社，p.8，2008.

東京学芸大学岩田研究室『小鹿野4区・長若4区の民俗―埼玉県秩父郡小鹿野町―』東京学芸大学地域研究室，2006.

山本正実「まちの記憶を継承する歌舞伎のまちづくり」『地方自治職員研修』pp.36−38，2004.